

「猫と庄造と二人のをんな」 より抜粋

英吉利（イギリス）人はこう云う毛並みの猫のことを鼈甲（べっこう）猫（ねこ）云うのであるが、茶色の全身に鮮明な黒の斑点（はんてん）が行きわたったついで、つやつやと光っているものは、成る程研いた鼈甲の表面に似ている。

何にしても庄造は、今日までこんな毛並みの立派な、愛らしい猫を飼ったことがなかった。ぜんたい歐洲種の猫は、肩の線が日本猫のように怒（いか）っていないので、撫で肩の美人を見るような、すっきりとした、イキな感じがするのである。顔も日本種の猫だと一般に寸が長くって、眼の下あたりは凹（へま）みがあったり、頬の骨が飛び出していたりするけれども、リリーの顔は丈が短かく詰まっっていて、ちょうと蛤を倒ました形の、カッキリとした輪郭の中に、すくなくて大きな美しい金眼（きんめ）と、神経質にヒクヒク蠢（うご）めく鼻が附いていた。だが庄造がこの仔猫に惹き附けられたのは、そう云う毛なみや顔だちや体つきのためではなかった。もしも外形だけで云うなら、庄造だってもっと美しい波斯（ペルシャ）猫だの暹羅（シヤム）猫だのを知っているが、でもこのリリーは性質が実に愛らしかった。蘆屋へ連れて来た当座は、まだほんついに小ぢい、掌（てのひら）の上へ乗る程であったが、そのお転婆（てんぱ）でやんちゃなつやは、とんとつつか八つの少女、——いたずら盛りの、小学校二年生（にねんせい）ぐらいの女の児（こ）に云う感じだった。そして彼女は今よりもずっと身軽（みかろ）で、食事の時に食物を摘（つま）んで頭の上へ翳（かげ）（かざ）してやると、三四尺の高（たか）まで



跳び上ったので、すわっているには直ぐ跳び着かれてしまうから、しばしば食事の最中に立ち上らねばならなかった。彼はその時分からあの曲芸を仕込んだのであるが、箸の先に摘まんだ物を、三尺、四尺、五尺、と云う風に、跳び着く毎にだんだん高くして行くと、しまいには着物の膝へ跳び着いて、胸から肩へすばしっこく這い上って、鼠が梁（はり）を渡るように、箸の先まで腕を渡って行ったりした。或る時などは店のカーテンに跳び着いて、天井の方までクルクルと這い上って、端から端へ渡って行って、又カーテンに掴まって降りて来る、——そんな動作を水車のように繰り返した。それに、そう云う幼い時から非常に表情が鮮やかで、眼や、口元や、小鼻の運動や、息づかいなどで心持の変化をあらわすことは、人間と少しも違わなかった。就中（なかんずく）そのぱちりした大きな眼球は、いつも生き生きとよく動いて、甘える時、いたずらをする時、物に狙いを付ける時、どんな時でも愛くるしさを失わなかったが、一番可笑しいのは怒る時で、小さい体をしている癖に、やはり猫なみに背を円くして毛を逆立て、尻尾をピンと跳ね上げながら、脚を踏ん張ってぐっと睨まえる恰好と云ったら、子供が大人の真似をしているようで、誰でもほほ笑んでしまうのであった。

***留意事項**

- 部門・エントリーナンバー・氏名・作品名・本文の順でお読みください
- 複数応募の場合でも、一課題ごとに録音してください（連続録音は不可）
- 効果音やBGMは使用不可
- 群読や複数での朗読は不可
- 朗読より大きな音、二重録音など録音状態の悪いものは不可

